

協同の系譜

⑨

第1部 川崎 平右衛門

行基という先駆者

貧民救済や墾田開発

これまで8回にわたり川崎平右衛門を取り上げることによって、協同の源流を訪ねる「旅」を続けてきた。

当初、連載は6回の予定だったが、書くほどに武蔵野の歴史や木曾三川での宝暦治水事件などについて触れておきたいところが増えてきた。また、連載半ばを過ぎたところで読者から、①川崎平右衛門がもし現代に生きているとすれば何を考へ何を語るか②協同の系譜や働く者の歴史にも触れてほしい—とのありがたい注文を頂いた。

①については次回の最終回で触れることとして、②についてはここで特記しておきたい存在

農的デザイン研究所代表 葛谷 栄一

が奈良時代の高僧・行基である。京都大学名誉教授の池上惇氏は「宮尊徳について語る際によく行基にも触れておられる。

「知識結」形成し事業

行基は天智天皇7(668)年に生まれ、天平21(749)年に81歳で亡くなるまでの間、困窮者のための布施屋や道場、寺院、さらにはため池・溝・堀などによるかんがいや墾田開発、架橋の貧民救済・治水・土木などの社会事業の活動を繰り広げた。また、東大寺の大仏像造営のための勸進により、大僧正の位を与えられている。

行基は「知識結」という僧俗混合の宗教集団を形成して、活

動するとともに、現場を見て共感した民衆が、これに加わることで、数多くの事業を成し遂げた。行基を協同の先駆者として位置付け、注目している。

前回、協同が成立する前提として、協同を構成する一人一人の自立と自治が必要条件となり、リーダーシップが協同を促し動かしていく、との私見を述べた。

行基が活躍したのは、崩れつつあったとはいえ公地公民制が辛うじて残存していた時代である。こうした中で極めて強力な行基のリーダーシップによって「知識結」を可能にしたように感じる。

時代によって自立と自治という社会的条件と、リーダーシップとのバランスは変化する。要は近代に入り協同が協同組合として組織化されることによって、特別の偉人の存在なくして、協同活動が容易になってきたのが、歴史の歩みであり進歩といえるのではないか。

治水支えた専門集団

働く者の歴史については、体系的に展開するだけの知見もスベースもない。ただ一言だけ、治水や土木の歴史を調べる中で、渡来人や遣唐使などの海外、大陸からの技術の威力と同時に、工事を受け持つ石工や金山衆などの専門集団の存在を強く感じさせられたことだけは述べておきたい。

ところで、川崎平右衛門の死去から32年後、武蔵野新田開発を終えて美濃に向かってから50年たった寛政11(1799)に、国分寺市北町にある妙法寺の境内に武蔵野新田74カ村の農民により、またその4年前には同じ国分寺市西町の観音寺に3新田村によって、おのおの謝恩塔が建立されている。当地を離れてちょうど半世紀。開墾者の孫の代に謝恩塔が建立されたというのは、平右衛門の働きが豊かな実りをもたらしたことを端的に物語っている。(次回は8日付)



妙法寺境内に建つ川崎平右衛門謝恩塔 (東京都国分寺市で)